

—イザヤ7章・10-14、ローマ1章・1~7、マタイ1章・18-24

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒にいる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおりに、妻を迎え入れた。—マタイ1章—

待降節第4主日

「その子をイエスと名付けなさい」

預言者イザヤの時代。

大國アッシリア帝國の脅威に対抗するために、北イスラエルとアラム(ダマスコ)は、南ユダ國のアハズ王に協力を求めて同盟を結ぼうとしたが、アハズ王は、それを断り、アッシリアに対抗するどころか、かえってその保護を求めたのです。

預言者イザヤは、「富と力のアッシリア帝國にすぎた弱さを通して働かれる神の力を信じなさい。神に頼ることこそ危機は乗り越えられる」とユダの王に説得したが、「私は求めない。主を試すようなことはしない」と、口で最もらしい信仰心を装ったアハズ王の本音は、あてにならない神の救いよりも、手取り早い自分の判断に頼る不信仰で

した。

救いの計画に協力しなかったアハズ王に代ってその後、神はマリアに向かいます。

マリアは自分に信じ難いことも「神に出来ないことは何一つない」ことをわきまえる謙虚さで、自分の思いを控え神のことの実現に協力します。

このマリアの決断によって人間の最も厳しい試練となったのはヨセフであったでしょう。彼は婚約者の理解しがたい懐妊の衝撃に、おそらくは打ちのめされながらも、とった態度は、相手を生かすため「自分の思い」に死んで身を引くことでした。悶々としたその夜、夢のお告げによって、彼は畏れながら神の計画に参加します。こうして、アナビム(心の貧しい)と呼ばれる、少ない旧約の義人たちによって神の計画は実現することになり、

私たちの世界は主の降誕を迎えることが出来たのです。

迎える幼子の名はイエス。イエスとは、「主は救う」と言う意味です。

この方によって世が救われるためには、イエスを受け入れなければなりません。イエスは世界に平和をもたらしたいのです。

この世が平和を望みながらそれが実現できないでいるのは、私たちが一番大切にして私たちが生き方を方向づけている、私たちの価値観のせいです。神以上に大切にしているものを手放さない限り、平和は永久に来ないでしょう。

2022年12月18日

主任司祭 昌川信雄

